

日本藻類学会第 43 回大会開催記・参加記

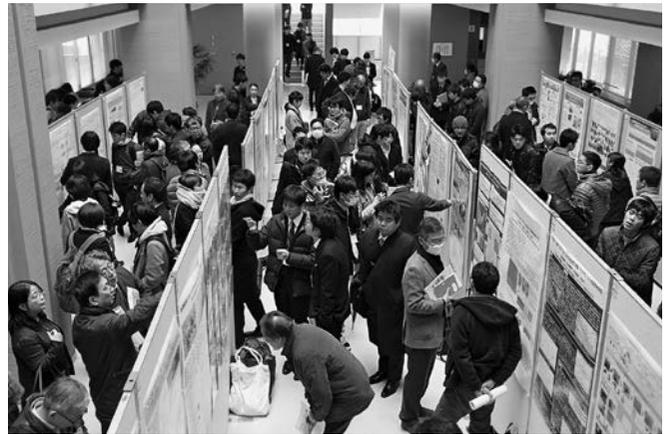
日本藻類学会第 43 回大会（京都）開催記

宮下英明・神川龍馬

平成 31 年 3 月 15～17 日の日程で、日本藻類学会第 43 回大会（京都）を京都大学吉田南構内（左京区）で開催させていただきました。本学での開催は第 29 回大会以来の 14 年ぶりでした。参加者は 268 名、その内学生が 100 名、発表では口頭 64 演題、ポスター 85 演題、また懇親会は 197 名と盛会でした。その一方で、京都特有の寒い雨に見舞われてしまったのは、大会会長と会計の 2 名が雨男であるからだと思います。寒い中でポスター発表となってしまった関係者の方々には深くお詫び申し上げます。

開催の準備は半年ほど前に、実行委員の招集と会場の確保を大学に申請するところから始まりました。3 月の吉田南構内は入学者説明会などのイベントに使用されるため、予約可能かどうかの確認を何度も施設掛と行いました。同じころ郵便局での口座開設も行いましたが、このために実行委員会開催計画、実行委員会規約、藻類学会大会プログラム（仮）などを提出しなければならず、書類の準備が大変でした。9 月頃から開催費を確保するため様々な企業の方にお問い合わせをしました。今大会にはいつも以上に多くの企業・団体からご支援いただくことができました。しかし一方で、「非常に興味はあるが広告用の年度内予算申請がすでに締め切られているため難しい」などの理由からお断りになる企業もおられました。9 月からではなく、もう少し早めに動く方がいいかもしれません。11 月頃には参加費の振り込み口座も完成し、参加申込書および要旨のメール送信のためのアドレスも作成しました。本当は、「不在状態にして自動ですべて返信して最後に確認する」つもりだったのですが、参加票の申し込み状況を何度か確認しているうちに「不在」が勝手に解除されてしまい、自動返信機能が働かなくなりました。さらに迷惑メールボックスに入ってしまう参加票もあり、これには自動返信機能は働きませんでした。結局これらのメールには自分で「自動返信メール」を送信する羽目になってしまいました。何人かの方々への受け取りの連絡がしばらく届かなかったのはこのせいでした。ご迷惑をおかけしてしまい大変申し訳なく思っております。また今回、集計の負担を減らすための試みとして参加票と要旨の提出先を変えてみました。普段と違うやり方に戸惑われた方がおられましたらご容赦ください。ただ、この点の変更の試みは、将来的に実行委員の負担を減らすためには必要不可欠と考えています。今回は行いませんでしたが、参加登録を完全にウェブ上で処理したり、要旨の登録フォームもウェブ上で投稿できるようにしたりすれば自動集計が可能になります。国際学会ではウェブ上での申込および要旨提出は普通に行われておりますので、日本藻類学会だけアナログ形式である必要性はないかと思えます。

このように開催前にバタバタとしておりました日本藻類学会で



ポスター発表会場



日本藻類学会特別賞・岡村賞授与式



日本藻類学会学術賞・山田賞授与式



懇親会風景



懇親会風景

すが、多くの企業や団体からご支援賜りまして、無事に開催にこぎつけることができました。琵琶湖博物館・大塚学芸員および京都大学・宮下教授が担当した開催初日のワークショップでは多くの方々から参加申込の連絡を受けましたが、スペースや器具、労力の関係上参加人数に上限を設けねばならず、お断りさせていただく方も出てしまいました。大変申し訳なく思う反面、非常に好評だという感触を得たのは心の支えでした。発表当日は、会場の時計掛用のベルを用意し忘れるという初歩的なミスを犯しました。しかしそれでも大きな傷にならずに済んだのは手伝ってくれていた学生の方々の機転によるものです。学生の方が教員よりも優秀だととても助かります。ライカマイクロシステムズ株式会社に開催いただきましたランチョンセミナーも好評でした。わずかながら余ってしまったお弁当は、お手伝いの学生たちが美味しくいただきました。

この学会は各地で毎年行われますが、各地の顔ともいえるメインイベントの一つといっても過言ではないのは、何と言っても懇親会です（事実、次期開催地の大会会長は対抗心を燃やされておられるようでした）。古都京都の威信にかけて、参加者に文句を言わせないくらいゴージャスな中にも奥ゆかしさを伴う「京都らしい」ものにしなければ。。。ここでも協賛企業の方々にお力添えいただき、そして生協の方々のお心遣いとお目ごぼしをいただき、料理とお酒のメニューは舌も胃袋も満足させるが胃もたれはさせないものを用意することができたのではないかと、担当した京都大学・幡野助教をはじめ実行委員一同自画自賛しており

ます。

この大会のもう一つの目玉であったのが若手発表賞と若手ポスター賞です。審査委員会をお引き受けいただき、ご多忙の中公平な審査のためにご尽力いただきました先生方には実行委員一同、厚く御礼申し上げます。公平な審査を経て選ばれたのは以下の方々です。

若手発表賞

微細藻類部門 大沼 亮 (国立遺伝学研究所)

「渦鞭毛藻類 *Nusuttodinium* の盗葉緑体現象から紐解く細胞内共生の進化」

大型藻類部門 大竹正弘 (創価大学大学院工学研究科)

「褐藻 *Sargassum macrocarpum* の伸長期から成熟期におけるリン吸収・要求速度の変動」

若手ポスター賞

微細藻類部門 白鳥峻志 (海洋研究開発機構)

「新奇原生生物 SRT308 株が明らかにするユーグレノゾアの初期進化」

大型藻類部門 本間由莉 (新潟大学大学院自然科学研究科)

「新潟県沿岸のアカモクにおける季節集団間の遺伝的変異の解析」

受賞者には、大会会長から賞状と副賞として賞状筒および“能登の食べる海藻図鑑”（昆布海産物處 しら井）が贈呈されました。その内若手発表賞受賞者は懇親会内で授賞式を行うことができましたが、ポスター賞については2日目まで審査が必要であったために授賞式ができなかったのが心残りです。このような若手の研究活動への顕彰は、藻類学分野を発展させるための一つのカギになるかもしれません。審査方法や授賞式などの細かい点は、今後さらに改善の余地があると思います。

最終日には、「琵琶湖における藍藻類ブルームの現状と問題点、対策と展望」と題して無料公開シンポジウムを開催いたしました。本シンポジウムでは、近年のアオコに関する研究成果を総括し、さらに藍藻類に関して新たに発生するようになった現象や、環境に優しいアオコの抑制対策等の最新の研究成果を6人の演者に発表していただきました。発表後の総合討論では、アオコ問題について様々な側面から意見が出され、今後の課題が話し合われました。本シンポジウムの参加者は82名で、そのうち8名が学生、25名が研究者以外の参加者でした。研究に普段関わることのない一般参加者が25名いたことは、琵琶湖の環境問題について社会的に関心が高いことがうかがえ、そのような一般性のあるシンポジウムを開催することができたのは大きな喜びです。

至らないところも多々あったかと思いますが、本年度も無事に大会を終了することができました。学会本部の方々や京都大学の学生の皆さん、ご参加いただきました皆様のご協力のおかげです。改めて御礼申し上げます、ありがとうございました。

(京都大学)